

氏 名	ベンヤミン・フィツェンライター
学位の種類	博士(造形)
学位記番号	博第20号
学位授与日	平成28年3月18日
学位授与の要件	学位規則第3条第1項第3号該当
論文題目	歌舞伎のセリ上げにおける表現を巡って —「けいせい天羽衣」のセリ上げの復元と視覚言語的分析—
審査委員	主査 武蔵野美術大学 教授 新島 実 副査 武蔵野美術大学 教授 陣内 利博 副査 武蔵野美術大学 教授 寺山 祐策 副査 武蔵野美術大学 教授 今岡 謙太郎 副査 武蔵野美術大学 名誉教授 小石 新八

内 容 の 要 旨

本論文においては、1753年に大坂で初演された「けいせい天羽衣」(以下、「天羽衣」と略す。)という日本の歌舞伎作品における「大道具のセリ上げ」(以下、「セリ上げ」と略す。)と呼ばれる舞台装置を研究対象とする。「セリ上げ」はある芝居における大道具と登場人物を舞台下から上げるエレベーターのような機械である。歌舞伎の「転換道具」の代表的な実例として論文の第1部においては「天羽衣」の「セリ上げ」の復元を行い、その結果について第2部においては視覚言語的分析を試みる。

まず、当時の歴史的文化的背景、大坂の芝居街・道頓堀の成立、「天羽衣」に関する基礎的な情報について調査を重ね、芝居の筋を要約し、作者並木正三の伝記の概要を挙げる。正三の独特な作法の成立は、からくり芝居・人形浄瑠璃で働いた頃の経験と彼の「作者・技術者・舞台美術家」という三種の才能が複合的に合わさった結果であることを推論する。

次に、初演の「天羽衣」の大切りの空間演出、とくに「セリ上げ」の形と機能、当時の大坂の舞台様式を推定復元する。復元のために「天羽衣」の台帳の解説を主軸として行い、また、様々な江戸時代の書物や絵画の一次文献も資料として活用する。資料に基づき「天羽衣」の「セリ上げ」は「押し出し道具」の屋根と「セリ上げ」の座敷、2つの個体的な部分によって組み合わされていたことを推論する。なお、大坂の大芝居劇場は江戸より速く能舞台からの解放化を実現し、特に舞台縁の線は能舞台のスリーサイド・ステージよりまっすぐになり、それは人形浄瑠璃の舞台の影響とも関連し、舞台の正面化を高め、強大な転換道具の発展を支えたと仮説する。その仮説を「天羽衣」の初演の舞台面とセリ上げ、大

道具の復元図と復元模型によって示す。

さらに、記号学・記号論的な方法により「セリ上げ」を視覚的記号・表現として構造分析し、「セリ上げ」の物語論的かつ意味論的、構文論的、語用論的な特性を検討する。「セリ上げ」における「記号表現」は「屋台の色彩と形」と「垂直的な動き」からなることを明らかにする。「セリ上げ」の「大道具の部品」は高いアイコン性とインデックス性を持ち、「仕掛けの部品」によって果たされた「動き」は現実には存在しないものとして高いシンボル性を持つことがわかった。「セリ上げ」を大道具の「視覚言語」と演劇の筋を総合する視覚記号体系として解釈し、通常幕などで場面を分ける「境界線」は、「セリ上げ」の使用によりそれ自体が物語の単位となるという特性を示す。なお、意味論的な面で「セリ上げ」の表現は「天と地」や「上と下」のような、人間の社会や信仰、精神における普遍的な原理と関連することについても述べる。構文論的な分析により「セリ上げ」が舞台上のフィクション的な空間を広げる特性を明らかにする。屋台の形と仕掛けの上方向の動きにより舞台面の「垂直性」と「正面性」が高まり、舞台の上と下の空間は単位に分かれる。また、仕掛けの動きにより舞台上のフィクション的な世界が動かされたので、観客の視野が広がり・変化する。

比較の章においては「天羽衣」の「セリ上げ」の特性と三作の歌舞伎芝居における「セリ上げ」を比較する。「垂直性」や「正面性」、「絵画性」という特性は全例において見られ、「空間の単位」の特性にも共通点があり、「セリ上げ」は建物を上げ、この建物の一階と二階、屋根は空間の単位となり、人物がどの単位に配置されているのかということは、彼らの役柄と関連していた。また、人物の目線や液体など、「空間の単位」を繋げる要素は筋の中で重要な役割を持っていることも明らかとなった。

最後に歌舞伎の「セリ上げ」の特性を江戸時代の印刷物である「錦絵」と「合巻」における表現と比較する。「錦絵」の実例では江戸時代の絵師が「セリ上げ」の場面を平面的な媒体に描写するために大判何枚かを並べる「続絵」と呼ばれる形式を利用した。縦の「二枚続き」または「三枚続き」により「セリ上げ」の形を立体的な舞台空間から平面的な錦絵へ変換した。時間軸は存在しないので「錦絵」の物語性は比較的低く、芝居から最も迫力のある「山場」が選択された。すなわち、絵師は「セリ上げ」を紙上に表す為に媒体の特質を利用する工夫を考え出したのである。「合巻」という絵入り小説においても「垂直性」や「動き」など、「セリ上げ」の特性を紙上表現する画法が見られ、その画法から媒体の特質に適応する独特の垂直的な画法が発展した。絵師は製本の見開き2ページにわたり、垂直的に配置された挿絵の構造を利用し、「垂直性」を実現させ、受容者はこの垂直的な挿絵を觀賞する為に本自体を廻すこととページをめくることが必要となった。そうした表現は「口絵」の場合では歌舞伎の見得のように人物を奇麗に見せる「絵画的」な効

果を目的とし、見開き二枚・三枚を並べる画法もある。それに対し、「本文の挿絵」の場合では筋を進行させる・筋の空間を見せる為に見開き2ページにわたる挿絵が度々利用されている。

結論においてはすべての研究成果を解釈し、「セリ上げ」と「セリ上げ」に近似する印刷物の表現における「意味」と「構造」の相互関係について述べる。「物語の視覚言語」の「基本文型」と「セリ上げ」における「ミニ物語」についての仮説で本論文を完了する。

審査結果の要旨

●審査結果の要旨

本論文は、江戸時代の歌舞伎作家並木正三の「けいせい天羽衣」の調査研究によって、「セリ上げ」という舞台装置が今日の日本のアニメ・漫画に通じる視覚言語としての意味を持つことを論証している。「クール・ジャパン」と呼ばれる現象の発生とともに、江戸時代の視覚文化にアニメ・漫画の原点を探る研究が増えてきているが、その研究者の大部分は文学・美術史・日本学の領域の研究者である。申請者はドイツでの映画製作の学びを基盤として、自ら「紙芝居」や「漫画」「映像」など様々な視覚言語の媒体表現を通して、「実際にやってみる」という表現者の姿勢を持っている。注目すべきは、並木正三の「セリ上げ」という舞台装置に絞り込んだことである。その調査のために、語学の壁を超えて日本全国を巡って様々な人と出会い、「セリ上げの復元」を行った。歴史的、美学的、造形的、さらに教育的な内容を持つユニークな研究となった。

●論文の構成

論文は、以下のような構成となっている。

第1章 調査

当時の歴史的な背景と作者並木正三の伝記、芝居の内容を含む「天羽衣」についての調査。

第2章 復元

次は「セリ上げ」が利用されていた「天羽衣」の場面を推定復元する。

台帳の解読を主軸として、江戸時代の書物と絵画の一次文献を分析し解釈する。

第3章 分析

表現としての「セリ上げ」を分析する。

記号学的かつ物語論的な方法を分析手段による。特に「セリ上げ」の意味論的かつ構文論的な特性と物語の中の役割に注目。

第4章 比較

第3章の分析によって定義された「セリ上げ」の特性を踏まえ、江戸時代の他のメディアにおける表現の実例と対比する。

結論

結論においては、調査と分析、比較や解釈から得た「物語の視覚言語」についての新しい認識の評価を試みる。

●審査の経緯

審査当日には公聴会を行い、続いて審査委員会を開催した。審査委員会では、公聴会での発表及び質疑応答を踏まえて、申請者への審査委員による質疑応答を行い、申請者が退出後、最終的に合否を判定した。

公聴会の展示会場には並木正三の経歴の「紙芝居」、地方歌舞伎の制作ワークショップの「ドキュメンタリー映像」、上方歌舞伎劇場のセリ上げ「復元模型」、研究論文を基盤として作成中の「漫画」が展示された。約40名の観客の前で本論文のプレゼンテーションを行い、これまでに会った専門家からの貴重なコメントがあった。並木正三という人物に注目したことの重要性が指摘され、台本からだけでなく舞台装置の復元まで踏み込んだことは、美術大学だからこそできる取り組みであると高い評価がなされた。特に発表者の日本語能力の素晴らしい進歩への指摘が印象的だった。公聴会後の審査委員会では、「セリ上げ復元」だけでも十分な内容があり問題を広げすぎた印象が語られたが、「記号論的分析による歌舞伎」の珍しさとそれによって一般化しようとする姿勢が評価された。今後の課題として、本論文と表現者としての繋がりを大いに期待する。

以上のような質疑応答と議論を経て、最終的には審査員全員で、本論文と制作物の意義と価値を認め、博士号の学位にふさわしい学術レベルを有するものと判断し、合格と判定した。



図1)
「けいせい天羽衣」の初演の舞台面とセリ上げの仕掛け 模型 1840 mm x 920 mm x 750 mm 2015年
企画・制作：B. フィツェンライター 写真：上村 尚子

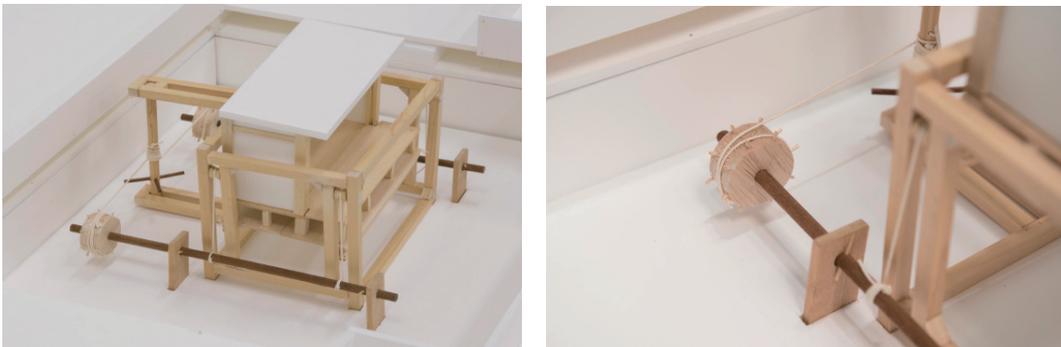


図2)
「けいせい天羽衣」のセリ上げの仕掛け 模型 270 mm x 270 mm x 236 mm 2015年
企画・制作：B. フィツェンライター 写真：上村 尚子